

「上海」論序説

江後寛士

吉本隆明が「横光利一論」（『海』昭54・4）を書いた。百枚の力作だが、横光の全体を論じるには分量が足りず、いささか目の粗いものになってしまったという印象は免れない。しかし、目が粗いなりに基本的なことがらについて教えられたこともないではない。「悲しみの代価」や「負けた夫」に代表される初期横光の世界を人宿命的な性格悲劇Vとして片付けて問題を袋小路に追い込んでしま

い、「機械」の主人公が最後に悲鳴を挙げる部分をとらえて、人々は悲鳴と感ぜないで心理の箇のなかに反響する不協和音として聴き流してしまふだろうVと論断するやり方には賛同しかねるのだが、「旅愁」を論じて（と）いうより若干触れなければならなかった悲劇の原因について述べている点には、耳を傾けさせるものがある。

横光利一はヨーロッパとかギリシャという原理に対比されるべき原理としてA日本Vという概念が存在しえないことを識らなかつた。ヨーロッパとかギリシャとかと対比しうる概念は、日本を包括したいならば、ただアジアという概念だけである。なぜならA日本Vという概念は地理的アジアではありえても世界的な時間を独自には構成しえないからである。少くとも歴史の現在までは。横光利一の悲劇も、「旅愁」の主人公の表白する滑稽感も存在しえないA日本Vという原理をヨーロッパとその原理としてのギリシャに対置させようとしたところに発祥した。

横光が常識では考えられないほどの無理をしなければならなかつたのは、存在しえないA日本Vという概念を客観的に示そうとしたためであつたのだろう。伊勢の大鳥居というシンボルを思い描く心情的な段階を越えて、言霊の原理や幣帛の幾何学によって日本の優位性を説こうとし、神がかり的な日本文化称揚論を展開した。そして、それに普遍性を与えるためにはA概念Vの構築が不可欠であつた。しかもその概念化の方法は、相手方から学んだ西洋の論理であつたという、二重の悲劇性をはらんでいたのである。

横光は、日中戦争から太平洋戦争への道程のなかで、愚直なほどに誠実にこれを遂行しようとした。大日本帝国の押し進める聖戦のさなかにあつては、ヨーロッパに對置させるものはA日本Vでなければならなかつた。だが、ほんとうに横光はA日本Vという概念が存在しえぬことを知らなかつたのだろうか。

「支那海」（昭14・1）によれば、昭和十三年十一月、華中、華北を旅したのは、西洋に對抗する東洋を模索する必要があつたからである。「旅愁」発表開始の翌年のことであつた。日本の軍隊に取り囲まれた不幸な情勢下ではあつたが、上海の共同租界をヨーロッパにはない近代都市と認めて、A東亜の共同体Vの拠点になるのではないかと期待を示している。また、東洋思想の探求も行われ、政治・思想の両面から、ヨーロッパに對抗しうる東洋を模索しているのである。⁽¹⁾

しかし、時代の要請に従えば、たとえ世界的位置が保証されなくてもA日本Vをもつて對抗しなければならなかつたのである。無理は承知の上であつた。「上海」に見られるように、素朴に母国を愛し信じようとする横光にさらに時代が拍車をかけたのである。世界を客観的に展望できる人々にとっては、存在しえないA日本Vの概念化によって西洋に挑む横光の姿は、まさに風車に挑むドン・キホーテと見えたにちがいない。A概念化Vと言えばスマートに聞えるが、平たく言えばデッチアゲとさして変りはないと思う人もあつたらう。横光のA日本V概念の構築は、このような受け取られ方をしても仕方がない、乱暴で強引なやり方であつた。

野島秀勝⁽²⁾は、「旅愁」をA近代日本の深刻な戯画Vであると言ひ、作者に戯画を描く意識はなかつたかもしれないが、Aこの昭和が生んだ最高の馬鹿正直な精神の誠実Vのみがこの戯画を描きえたことは事実であり、自らをまるごとA戯画Vと化さなければならなかつたはずだと言ふ。そして、A横光は意識の底でそれを知悉していたのではないか。ただ自らを戯画と化すことに対して自嘲というような心の贅沢を彼の誠実は許さなかつたまでではないか。戯画ならばいっそ戯画に徹しよう、ここに自意識の不毛を知つた自意識家の決断があつたように思われてならぬ。Vと非常に好意的な理解を示している。実にみごとに自意識家横光

像である。できることなら、私もそう思いたい。そうであるならば、時代の不幸に真剣に付き合ひ、時代のさなかに大膽に身を横へた横光の悲劇を思うとき、どれだけ救われる思いがするか、はかり知れないものがある。

しかし、横光は八馬鹿正直な精神の誠実Vそのものごとく、愚直に時代に付き合つた。作者自らに似せたドン・キホーテを作中に登場させて、それを冷やかに八自嘲Vしてみせる意識の二重構造はなかった。横光はストリートに信じたのだ。八馬鹿正直Vなまでに信じようとしたのだ。横光には、ドン・キホーテを創つて操るような要領のよさはなかった。要領のよさとはいかにも俗なことだが、作家の基本である自己対象化の際の距離は、ときとして、自己を安全地帯に避難させる狡猾なやり口として機能する場合がある。戦時下は、総避難の時代であった。だが、横光は愚直なまでに時代に身を曝した。十二月八日開戦の日の日記は次のように記されている。

戦はつひに始まつた。そして大勝した。先祖を神だと信じた民族が勝つたのだ。自分は不思議以上のものを感じた。出るものが出たのだ。それはもつとも自然なことだ。自分がパリにゐるとき、毎夜念じて伊勢の大廟を拝したことが、つひに顛れてしまつたのである。夜になつて約束の大宮へ銃後文芸講演に出かけて行く。帰途、自分はこの日の記念のため、欲しかつた宋の梅瓶を買つた。

右の文は、「日記から」という表題のもとに發表されたものであるから、純粋な日記ではないが、横光の素顔と見てさしつかえないだろう。この素顔は、描かれたドン・キホーテとびつたり重なるものである。このことからして、横光には自己を踊らせる戯画の意識はなかったと言つてよいだろう。いや、野島の言う八自らをまるごと戯画と化すVとは、日記までそうなることを意味するのであったのかもしれない。だが、自らを戯画化するためには、自らを客観視する距離と眼が必要であり、それがなければ八戯画Vは成立しないはずである。野島は八自嘲というような心の贅沢を彼の誠実は許さなかったVのだと注意深く説明して、この距離と眼を処理しようとしているようであるが、この距離と眼がなければ、それはもう八戯画Vとは言えないのではないか。横光はもつとストリートに信じ、その信じるところに自己の存在をかけた。八戯画Vなどと言えるのは、もはや安全地帯にゐる歴史家、批評家の位置に身を置いてゐるからではないか。狂気とも言われかねない愚直さをもつて誠実に時代に身を横たえた横光とともに私たちもその時代を共有して、はじめて横光の愚直さを愛することができるのでは

ないかと思う。

自然主義に対抗したときの初期横光は、傀儡を作つたのであった。「日輪」や「ナポレオンと田虫」がその典型である。その後「花園の思想」などで現実の反転を試みたが、その次には現実を直接取り上げる写実へと移つて行つた。自らの作風の変化を振り返つた次のような一文がある。

私は一番最初は詩を書いた。次には戯曲を書いた。次には象徴的な小説を書き出した。次には、小説を純正な写生で押してみた。その次には写実的に高める工夫をやつてみた。それから、再び象徴へ舞ひ戻つた。比の頃が私の新感覺派時代である。その次には再び写実へ戻つて来た。私はここで暫く落ちつきたいと思つてゐる。（「まず長さを」）

こう書き記したのは、昭和三年二月のことである。四月上海に渡り、「上海」の第一回「風呂と銀行」が書かれたのが十一月であった。写実への移行が初めての長編「上海」となつて現れたのである。その「上海」には、概念化されない八日本Vが素朴な形で求められている。横光は、「旅愁」執筆中の時代の要請に従つて急遽八日本V追求を始めたものではなかった。吉本隆明は「上海」には全然触れていないが、八日本Vの問題を論じるには「上海」まで溯らねばならない。

二

「上海」は、新感覺派文学の集大成として位置づけられている。集大成とは言うものの、新感覺的表現による長編への挑戦にとどまらず、虚構の世界から出て現実社会を対象とするという大きな転換が試みられたのである。現実社会を写すとは言つても、自然主義的リアリズムでないことは言うまでもない。冒頭の敷衍を見れば、新感覺派の好んで用いた表現の特徴が存分に生かされていることがわかる。特に風物描写の部分は新感覺派そのままである。新感覺派は、人工的な虚構の上に操り広げられる原色の街や、物そのものが生動する比喻や擬人法によつて構成された世界を描くことを得意としたが、これは現実離れた上海の共同租界や革命的暴動を写すのに適した表現であった。虚構の世界でしか駆使できなかった表現が、なまの現実をそのまま写すことのできる対象に出会つたと言つてよからう。まさに上海は生きた虚構であつたのだ。

世界各国から集まつて浮草のごとく八虚無の街上海Vを漂う人たちは、新感覺派にとつては恰好の素材であつた。相対的な人間関係の作り出す状況の中で、自己喪失に追い込まれる人間の追究は、「日輪」以来、新感覺派の文学を推進してき

た横光の思想であった。「上海」の参木は、その思想を托されての登場であった。

参木は、上海の激動する社会を自由に動きまわることのできる人物として設定されている。動きまわるといっても、参木は決して行動的な人物ではない。

▲もう十年日本へ帰つたことがないV参木は、その間A銀行の格子の中で、専務の食つた預金の穴をペン先で縫はされてただけだつたVのであるが、銀行の現金輸送車が襲われるという噂が流れると、生命にかかわる危険な仕事は専務自身が行うべきだと主張して首になつてしまふ。大変に正義感のあふれた勇氣ある行動のように思えるし、専務の悪事を吹聴しなかつたのは預金者を守るための良心的な配慮だとされているのだが、これは参木を銀行の格子の中から引き出すための手続きに過ぎず、中国共産党の闘士芳秋蘭を愛する設定も、行動人としての性格を与えるというより、暴動の渦中に彼を引き出すためのようで、その結果、彼は混乱する上海の状況を観察する役を与えられることになるのである。

ともかく、参木には徹底的に自由な境遇が与えられているのである。外地に住む独身の男性で、国の母を思う以外は何の束縛もなく、十年勤めた銀行をやめるときも生活のために思いとどまるといった配慮をいっさいしなくてすむ境遇におかれている。境遇ばかりではなく、意識もまた自由であり、束縛のない全き自由は虚無を生み、Aニヒリズムの舞踏Vを練り広げる上海の底で、彼は死の隣りに生きている。銀行の格子の中で他人の不正をつくろう努力と忍耐を強いられていた間はA死の魅力Vも、母への孝行のため思いとどめられているのだが、銀行を首になつて街に投げ出されると、死は観念の域を出て現実味を帯びてくる。就職を依頼した高重に、危険なところならあると言われて、▲もうかうなつちや、なるたけやられる所の方がいいんですよ。さばさばしますからな。Vと答えるようなニヒリズムに参木は身をまかせているのである。

「日輪」以来書き続けられた、存在の基盤を失つた人間が、傀儡としてではなく、現実社会に生きた肉体をもつものとして造型されたことは、新感覺派文学の集大成であると同時に、虚構から写真へという新たな試みとして注目すべきことであつた。

ところが、生きている虚構は生きているがゆゑに安定を求める。横光の思想そのものが安定を求めはじめたと言つた方がいいだろう。参木は束縛のない全き自由な境遇にありながら（と言うより、あるがゆゑに）存在の基盤を完全に失つて喪失状態になると、何らかの拠り所を求めるようになるのである。人工的な虚構の世界にあつてはいかなる喪失状態をも作り出すことができるが、現実の問題と

なるとそうはいかないのであろうか。全き自由に生きる術を知らず、束縛を求めるのは奴隷の思想である。参木の生き方にその傾向が全然ないとは言えないが、拠り所の求め方は、自分の皮膚は日本人だから、日本人であることを忘れようとしても忘れられないのだといった宿命論的なものである。

参木は酒を飲んで甲谷に言う。

——お前は百万円擲んだとき、成功したと思ふだらう。ところが俺は、首を縄で縛つて、踏台を足で蹴りつけたとき、やつたぞと思ふんだ。——

彼は絶えずその真似だけはやつて来た。しかし、彼の母が頭の中に浮び上るとまたその次の日も朝からズボンに足を突き込んで歩いてゐた。

——俺の生きてゐるのは孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。——

▲俺は何んにも知るものかVとは、参木のニヒリズムを表す自己放棄を実感的に言い放つたことばだが、その前の▲俺の身体は親の身体だVということばは主体性喪失の根拠を示すものであると同時に、救済の根拠ともなりうる表裏一体の意味をもっているのである。

上海の共同租界に群がる人々は、すべて▲本国の血Vをもつて集まっていながら、本国を失つて、祖国を思い続けている。冒頭で登場した参木が最初に接した人間は、波打際のベンチに並んでいたロシア人の疲れた春婦達であつた。参木は誘いをかけられ、煙草を求められるとそれに応じながら言つた。

「毎晩ここかい。」

「ええ。」

「もうお金もないと見えるな。」

「お金もないし、お国もないわ。」

「それや、困つたの。」

参木はそれだけで通り過ぎて行くのだが、客待ちの女が男と短いことばを交わすの中で、▲お国もないわVと言わせるのは唐突の感を免れない。誘いをかける男に、革命のため祖国を追われたことの恨み言を言つてみては仕方がないだろう。それでも作者は敢えて言わせているのだ。

この短いことばには、二つの重要なモチーフが托されている。一つは、いま取りあげようとしている祖国の問題であり、いま一つは、マルキシズム批判の問題である。

上海に集まつた人たちは、本国からばじき出されたのであり、帰国しても生活

の場はなくなつてしまつてゐる。英國の駐屯兵でさえも同様である。△掃溜▽と
いう比喩には、一般的には母国の秩序からはみ出した落伍者の寄り集まりといつ
た負価値と同時に、人種や国境と無関係な、もはや居直りの必要もない自由な生
き方ができる、言つてみればルンペンの安逸という印象がある。だが、この印象
は個人を対象とした場合であつて、各国の資本が進出する共同租界の動向は母國
の命運を左右する重要性をもつており、上海は海外進出の前線基地のような意味
をもたされてゐるのである。それは△掃溜▽のようなところなのだが、△掃溜▽
ゆえにその底には、はかり知れないエネルギーが潜んでゐるとも言えるのだ。

しかも、個人もまた同様に母國に利益をもたらすものとされてゐて、革命のた
め母國を失つたロシア人以外は△余りある土貨を吸ひ合ふ本國の吸盤▽となつて
生活しなければならぬのである。また、無為無職のものでもその肉体が空間を
占めてゐる以上、△愛國心▽の現れとなつて活動してゐると同様であるといふ
意味が与えられてゐるのである。

彼は、日本にをれば、日本の食物をそれだけ減らすにちがひなかつた。だ
が、彼が上海にゐる以上、彼の肉体の占めてゐる空間は絶えず日本の領土と
なつて流れてゐるのであつた。

——俺の身体は領土なんだ。此の身体もお杉の身体も。——

お國のための口減らしに自分の存在意義を認めるとは、あまりにもみみっちい
ことのように思えるが、これが参木の思想の基盤となつてゐるのである。お杉が
首になつて春婦に身を落とす、参木も首になつてしまつたときの生の抛り所はこ
のようにして求められるのである。

また、別の局面もある。参木は自由な人間であつたはずだが、秋蘭に△あたく
しにはあなたが他國の方とは思へませんの▽と愛を含んだことばで語りかけられ
ると、日本人であることを以前にもまして強烈に意識しはじめるのである。そし
て、中國のプロレタリアと日本のブルジョアジーについての議論の中で、△僕は
マルキシストのやうに、自分を世界の一員だと思ふやうなことが出来ないだけの日
本人です。▽△僕は日本を愛してゐます▽と自分の立場を表明する。参木は論理
を通したつもりで議論を進めるのだが、秋蘭は△人でもそれは、あたくしにはあな
たがただお國の味方をなすつていらつしやるだけだと思はれますの▽と切り切
るのである。この秋蘭のことばは、参木の主張に論理が欠如してゐることをはつ
きり指摘してゐる。

横光は、デカルトの△われれ想ふ故にわれ在り▽とは脳中の觀念に過ぎぬとし、

△われ在るに非らざれどこの痛み何処より来る▽といふ東洋人馬祖の方が現実を
重んじてゐると説いてゐる（「北京と巴里」）。△われれ想ふ故にわれ在り▽とは
西洋の認識論の根本だが、参木の身体領土論がこれによく対抗しうるものであ
るか。参木の立場は、自分は日本人だから日本人であらうとするのだ、という宿
命の追認に過ぎない。精神は日本人でなくなつたとしても、皮膚が日本人である
かぎり、日本人であることを拒否できないのである。

横光としては、日本人が日本の領土を背負つてゐるとするのは、事実に基づい
てゐるのだから、マルクス主義者以上に唯物論的であるのだと言いたいのかもし
れないが、いづれにしても、参木のこの身体領土論による自己認識は、論理以前
と言ふべきであらう。吉本隆明言ふところの△概念▽化が不可能であることは勿
論である。

しかし、論理以前の宿命論ほど強力なものはない。いさゝか疑ふことをしな
いからである。△掃溜▽のごとき上海を自由に歩きまわる観察者の役を与えられ
たはずの参木は、高重の手先となつて暴徒の状況を△視察▽することになり、遂に
は、△斥候▽となる愛國者へと変貌してゆく。いや変貌ではなく、顔立ちがはつ
きり見えてきただけで本質は變つていないと言ふべきであらう。

ところで、参木は性格的には右のようなはつきりした面は全然なく、何事にも
徹底せず、中途半端で優柔不断な人物として作られてゐる。女を愛する気持はあ
りながら好きな女には手も触れず、恋しい人妻の夫の死を待ちながら死の報せを
受けると禁欲的になり、虚無的な表情を見せるかと思ふと感傷的になるといつた
具合である。基本的には誠実で善良そのものといった人物であるが、その他の甲
谷、山口など拝金主義者やアジア主義者の明解な顔立ちに比べると、何事にも不
徹底な知識人という印象が強いのである。

しかし、そうした曖昧な弱々しい人物像でありながら、いや、だからこそ、参
木の中にある△日本▽だけが強烈に訴えかけられてくるのである。

三

今回「上海」を読むと同時に、「上海」執筆時及びその前後の評論や形式主義
文学論争などについて併せ読んでみた。主なものは、「新感覺派とコンミニズム
文学」（昭3・1）「唯物論的文学論について」（昭3・2）「形式物と実感物」
（昭3・3）「愛嬌とマルキシズムについて」（昭3・4）「文芸時評」（昭3
・11）「人間学的文芸論」（昭5・5）などである。

その結果得られたことは、これら文学論に見られるところのマルクス主義文学に対する攻撃の論理が小説「上海」にそのまま持ち込まれていて、特に参木と芳秋蘭の議論は芸術派・プロレタリア文学論争政治版の感があり、「上海」執筆の意図には、マルキシズム批判が重要課題としてあったのではないかという問題点である。

岩上順一は言っている。

意味があるのは、五・三〇事件を中心として、いろいろな社会層の思想や観念の代表者を羅列して、それぞれその信条やイデオを物語らせることによって、上海に渦まいていた社会的思想的な混乱を象徴すると同時に、知識人としてもっとも切実な思想上の葛藤に、ひとつの解決をもとめようとした点なのだ。

この作家が「上海」で、はたして真の解決をえたかどうかはうたがわしい。それにしても、彼が、秋芳蘭に仮托されているマルクス主義の思想にむかって、自家の全思考をかたむけていどみかかっているということだけはいうたがえない。

▲自家の全思考をかたむけていどみかかっているVとは、かなり大胆な言い方だが、相手役の中国共産党員芳秋蘭の反論もまた相当な迫力をもっており、いどみかかると十分な行動と論理の正当性が与えられているのである。

参木は高重の紹介で東洋綿糸会社の取引部に勤務することになり、中国の綿花を圧倒する印度綿の勢力や英国銀行の擡頭など国際相場の動きを知って、母国の経済力の貧しさに不安を抱く。そして、▲自分は日本を愛さねばならぬ。Vそのためには▲まづ、何者よりも東洋の支配者をVと痛切に思うのである。その思いは、▲競争の主人の死ぬことを望んでゐた自分自身が馬鹿馬鹿しくなるVほどに切実なものとなってきたのであった。

参木はこのような立場から、次のように秋蘭に切り込んでゆく。

誰でもマルキストは、西洋と東洋との文化の速度を、同じだと思つてるやうに見受けるんですけれども、僕はその誤りからは、ただ秀れた犠牲者を出すだけが唯一の生産のやうに思はれるんです。どうでせう。

参木の主張するところは、マルキシズムは西洋の論理であり、それを東洋に持ち込んで外国資本を圧倒すれば、結果は中国の資本を発展させるだけなのだから、プロレタリアートの解放にはならない。それより東洋の結束が当面の急務であると言うのだが、参木の東洋主義は、日本の資本が支配者として君臨するとい

う動かぬ構造をもっているのである。これに対し秋蘭は、東洋主義は日本のブルジョアジーに尽力するばかりだから、もはや清算しなければならないときが来た。貧しい人々の外はもう信頼できなくなったのだと言う。

参木もすかさず反論して、▲中国の人々が日本のブルジョアジーを攻撃するのは、結果に於て日本のプロレタリアを虐めてゐるのと同様だVと秋蘭の論理の矛盾を衝くのだが、ここで明らかにするのは、ブルジョアジーが衰弱すれば同時にプロレタリアートも困るのだという、親子国家観とも言うべき思想である。参木には階級意識が決定的に欠如しており、労働者は資本家の庇護のもとに生きていくので、秋蘭が人あたくしはお困にプロレタリアの時代の来るために、お困のブルジョアジーに反抗してゐるんでございますVと言ひ、そのために中国を解放しなければならぬのだと説くのだが、▲中国がいま外国資本を排斥することから生じる得は、中国の文化がそれだけ各国から遅れていくVだけだと、脅迫めいたことばを投げつけて終るしかないのである。

このように整理してみると、ニヒリスト参木にしては不似合なほどの熱っぽい主張も、ひどく硬直した身勝手なものでしかなく、むしろ、秋蘭の論理の方が整然としており、ただ批判すべき対象としてのみ登場させたのではないような感さえる。

小田切秀雄の、横光に左傾の可能性があったとする説は、このような読みから出たのかも知れない。

もしも当時のプロレタリア文学運動が横光のこの作品においてのような動向や努力をも正当に評価し支えることができたなら、横光はこの作品からただちに「機械」(翌昭和五年)のような心理主義的実験に移行してしまひはしなかつたかも知れない。

片岡鉄兵、藤沢恒夫、武田麟太郎らが続々と左傾する状況の中で、横光にも動揺がなかつたとは言えないようである。プロレタリア陣営壊滅後の昭和十年のことであるが、横光は、▲やはり「上海」は大きな転機だったね。あの時は友だちがみな左傾ししたし……。もし上海へ行かなかつたら僕は左傾していたらうと思ふ。Vと中島健蔵に語っている。芸術派の先頭に立ってプロレタリア陣営と対決してきた横光に、このような危機があったとは信じがたいことであるが、このことばを信用するならば、横光が左傾しなかつたのは、上海への旅をしたこと、作品「上海」を書いたことによると言える。したがって、プロレタリア陣営の評

如何によつては左傾の可能性もあったとする推測は当たらないだろう。

横光が、A當時の日本の革命運動および人民的・革命的な文学運動（いわゆるプロレタリア文学運動）の高揚期の活気と動向VにA強い刺激Vを受けていたことは間違いないだろうし、また、A武田麟太郎らのマルクス主義研究会に参加したり、のちには共産党に資金を提供し、学芸自由同盟に参加Vしたりしたという事実があったとしても、左傾の可能性は作品「上海」の内部徴証によって導き出されたものでなければならぬ。

秋蘭は重要人物であり、参木を論破しかねないほどの論理と力量が与えられているのは事実だが、思想的な意味でA肯定的な取扱いVがなされているとは言えない。それはむしろ逆であつて、作者横光は、参木の口をかりて、中国の解放運動の矛盾を衝くことに懸命になつていたのである。秋蘭たちの勢力は、龍業と暴動によつて大攻勢をかけるがゆえに可能性があるように見え、参木は守勢にまわる受身の立場をとらざるをえないがゆえに弱々しく見える。日本人だから日本を愛するのだという主張には、あたかも溺れるものは薬をもつかむといった印象さえある。しかし、愛国者参木とマルキスト秋蘭との議論は、マルキシズム批判のために設定されたと考えるべきだろう。

ここで注意すべきは、この論議が政治的現実を舞台として行われていることである。文学論であつたならば、もっと精細な論議を展開することができたであろうと思われるが、政治問題であつたがために目の粗いものになつてしまつたのではないか。

このことは、よくも悪くも、「上海」の性格をよく表わしている。「上海」は状況小説という骨格の上に成り立っている。『動く小説』（粟坪良樹）⁽⁶⁾という指摘も、その状況の内容を積極的にとらえて「機械」との関係を明らかにしようとするものである。私はさきに、横光が上海によつてA生きた虚構Vに出会つたと述べた。前半は新感覚的表現を駆使して、激動する状況を描出していたのだが、後半になると、政治というA生きた現実Vをリアリティックに描くようになる。

宮子のダンスホールに出入りするアメリカ人クリーパーは、ドイツ人フィールゼルと議論して言う。

われわれはお互に、もうどちらとも第二の世界大戦だけは、儉約しようぢやありませんか、儉約を。儉約はこれや何といつても、君、美德だからね。しかと分つたか。

この時点で横光が太平洋戦争を具体的に想定することは不可能だが、状況が第二次世界大戦に向つて動き出しつつあることを敏感に感じとつていたことは確かである。第二次世界大戦を経験したわれわれにとっては、どきりとさせられる会話である。

「上海」は、このような生々しい政治的現実の上に成り立っている。そして参木は、この激動する状況の中で押し流され、生存の根拠を喪失する危機に見舞われて、身を母国の領土につなぎとめようとするのである。

ここではまだ、「旅愁」に見られるような日本のA概念Vを構築しようとはしていない。東洋主義も政治的状況の中で機能する側面のみであり、ヨーロッパやギリシャに対置するA概念Vとしての東洋思想は、「旅愁」を書き始めた翌年に三たび上海を訪れることによつて模索されることになるのであるが、横光における日本と東洋の問題は、早く「上海」にこのような形で始まつていたのである。

注(1)神谷忠孝『横光利一論』（双文社出版、昭53・10）

(2)野島秀勝「『日本回帰』のドン・キホーテたち」（『批評』一九六七年春季号）同名の評論集（冬樹社、昭46・4）に収録。

(3)岩上順一『横光利一』（東京ライフ社、昭31・10）

(4)小田切秀雄『横光利一『上海』』（岩波講座『文学の創造と鑑賞』昭29・11）

(5)中島健蔵『人間横光利一』（『文芸』横光利一読本）昭30・5）

(6)粟坪良樹「『上海』論の試み」（『評言と構想』第4輯、昭51・1）

「『上海』論の構想」（同第5輯、昭51・4）